

東北 VALUE SIGHT 宮城



ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい ハウスマネージャー

中島 康志 (なかじま・やすし)

1958年、宮城県仙台市生まれ。
2003年より現職。2000年より宮城県難聴児を持つ親の
会会長、2008年より宮城広瀬高校評議員を務める。
ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい
〒989-3126 宮城県気仙台市青葉区落合4-5-3
TEL 022-391-1233・FAX 022-392-5535
<http://www.dmhcj.or.jp/>

「ドナルド・マクドナルド・ハウス」は、自宅から遠方の病院に入院している子どもの、付き添い家族が利用できる滞在施設である。東北では仙台市に「ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい」がある。ハウスの存在はあまり知られていないが、多くの人がこの取り組みを知り、困っている人に手を差し伸べられる社会になることが望まれるだろう。

病気の子どもとその家族を みんなで支える大きな家

我が家のようにくつろげる第2の家

1974年、アメリカのフィラデルフィアでアメリカンフットボール選手として活躍していたフレッド・ヒルの愛娘（3歳）が白血病にかかり、入院することになった。フレッドが小児病院で看病する中で目の当たりにしたものは、病室で子どものかたわらに折り重なるように寝ている母親、簡単な食事を済ませている家族の姿だった。彼もまた入院先の病院が自宅から遠く離れていたため、金銭的にも精神的にも苦痛を感じていた。そこで病院の近くに家族が安らげる宿泊施設ができないものかと考え、病院の近くにあるマクドナルドの店舗のオーナー、病院の医師、フットボールチームの仲間の協力を得て、募金活動を開始し、世界初の「ドナルド・マクドナルド・ハウス」が誕生した。今では世界30カ国、298カ所にハウスが建てられている。どの国でもドナルド・マクドナルド・ハウスは、困難な状況下にある家族を地域の住民の力で助ける重要なハウスとなっている。

ハウスは入院中の子どもとその家族がお互いに心

を通わせたり、病気は違っても同じ境遇にある家族同士が支え合い、励まし合ったりすることで困難を乗り越えられるように、また子どもが病院で治療を受けている間、安心して利用できるように、心のケアを含めた住環境を提供することを目的としている。豪華なホテルではなく、我が家のようにくつろげる大きな家を目指している。

ボランティアが支えるハウス

「ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい」は、2003年11月に開院した宮城県立こども病院の隣接地に、国内で2番目、世界では232番目のハウスとしてオープンした。ハウスは、1人1日1,000円で滞在できる。部屋数は16室、共用スペースにはキッチン、ランドリールーム、図書室、パソコンルーム、ダイニングルーム、リビングルーム、プレイルームが備わっている。

ハウスの運営は、ボランティアの力によって支えられている。現在ボランティア165名が月2回のペースで3時間ずつシフトを組んで活動している。ボランティアは高校生から60歳以上まで、さまざまな年代層の方が同じ立場で活動に参加している。一緒に活動することで、お互いに「得られるもの」が、生まれてくると考える。「ボランティアは楽しい」「いろいろな方と友達になれた」「生きがいを感じる」などの意見を聞くことがある。このことがボランティア活動の継続性を保つ力になっていると感じている。シフト活動以外に中庭の管理をしているグリーンボランティア、手作りのベッドカバーやアクリルタワ

シ等を作っているパッチワークボランティア、PRや募金活動を実施するイベントボランティアがハウスを支えている。

現在まで、「ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい」には、延べ4,457家族が滞在した。うち、宮城県外の家族が半数以上を占めており、救急車で宮城県外から来る家族や、県内でも遠方からドクターヘリで搬送されてくる家族もいる。今年の3月にはフランスから初めて来日して手術を受けた男の子の家族がハウスに滞在した。海外から来る子どもやその家族も安心して利用できるように、ボランティアが折鶴の作り方を教えたり、手作りの和菓子をごちそうしたりしながら、優しく見守った。ボランティアは心の中で「早く元気になってね」と願いながら活動している。その気持ちが滞在している家族に伝わるのだろう。ハウス内のノートには、「けっして1人ではない、たくさんの方に支えられている。明日からまた頑張ろう！」とメッセージを残している母親が多い。

多くの方に支えられて

ハウスはいろいろな企業や多くの個人の力によって支えられている。洗剤やトイレトペーパー、調味料、事務用品、未使用のはがき、電化製品、インスタント食品など、日常生活で必要とする物を寄贈していただいている。「自分たちは残念な結果になってしまったが、ハウスに滞在している家族に頑張ってほしい」と、日用品を寄付してくれた方もいた。マンパワーとしても、休日に社員が家族と一緒にハ

ウスの活動を行うなど、ボランティアに参加する企業が少しずつ増えている。

アメリカの場合、利益を上げている企業は社会に還元することがステータスとなっており、社員もチャリティー精神があり、積極的にボランティア活動に参加している。

日本では、社会貢献としてボランティア活動に参加したくても、どのような活動をしたらいいのか、どこに連絡したらいいのかわからないために、意識はあっても躊躇している企業が多い。ハウスは敷居が高くないボランティア活動の場である。ハウスのボランティアを足がかりとして社会貢献度の高い企業が増えるように、積極的に企業ボランティアを受け入れていくこともハウスの役割ではないかと考えている。

ハウスの課題と展望

現在、日本にはドナルド・マクドナルド・ハウスが7カ所で運営されている。しかしまだハウスを必要としている病院や家族が多く存在している。その気持ちに応えるためにはもっと多くの企業や地域の人たちの力が必要である。しかし残念なことに、まだまだハウスの認知度が低く、ハウスを知らない方が多いのが事実である。建設資金や運営費が募金で成り立っているハウスにとって、認知度を高めることが大きな課題である。多くの方にハウスの存在を理解していただき、もっと支援の輪が広がり、病気の子ども達が早く元気になって笑顔になるように、そして子育てにやさしい社会になるように目指していきたい。



募金活動をする「ドナルド・マクドナルド・ハウス せんだい」のボランティア